Tulips University of Tsukuba Repository

# 感謝表出スキルに関する文脈的アプローチに基づいた半構造化面接による予備的検討

| | |
|---|---|
| 著者 | 酒井 智弘, 相川 充 |
| 雑誌名 | 筑波大学心理学研究 |
| 号 | 54 |
| ページ | 29-38 |
| 発行年 | 2017-08-25 |
| その他のタイトル | A contextual approach to skills for expressing gratitude through semi-structured interviews : A preliminary study |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00148317 |

*Tsukuba Psychological Research*
2017, 54, 29-38



# 感謝表出スキルに関する文脈的アプローチに基づいた半構造化面接による予備的検討[1)]

筑波大学大学院人間総合科学研究科　酒井　智弘
筑波大学人間系　相川　　充

A contextual approach to skills for expressing gratitude through semi-structured interviews: A preliminary study

Tomohiro Sakai (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-0872, Japan*)
Atsushi Aikawa (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study explores the skills for expressing gratitude using a range of actual cases based on the social skills perspective. We supposed that a contextual approach to skills for expressing gratitude successfully works to combine expressions of gratitude and interpersonal situations. Data were gathered through semi-structured interviews from university students and were statistically analyzed using correspondence analysis. Results showed that a set of expressions of gratitude and interpersonal situation was different between same-sex friends and opposite-sex friends.
**Key words:** skills for expressing gratitude, contextual approach, semi-structured interview

## 問　題

「感謝（gratitude）」は，対人関係を形成，維持，進展させ（Algoe, 2012），感謝感情を表出する行動（以下，感謝表出行動）は，適応的な社会的行動とみなされている（Bartlett & DeSteno, 2006）。感謝表出行動の実行には，他者の向社会的行動の強化や当人の向社会的行動の促進（McCullough, Kilpatrick, Emmons, & Larson, 2001; McCullough, Kimeldorf, & Cohen, 2008），さらに，他者との関係満足度の向上（Algoe, Fredrickson, & Gable, 2013），他者との関係維持（Lambert & Fincham, 2011）などの様々な対人的な効果があることが実証されている。したがって，個人が他者に対して感謝感情をいかに表出するかということは，重要なソーシャルスキルの一つと考えられる。そこで本研究では，感謝表出行動をソーシャルスキルの観点から捉えて，「感謝表出スキル（skills for expressing gratitude）」という概念を創出し，どのような対人場面において感謝表出スキルが実行されるのかを検討する。

感謝表出スキルとは，従来の研究における感謝の定義（Watkins, 2007など）と，ソーシャルスキルの定義（相川・佐藤・佐藤・高山，1993）とを組み合わせて，「個人が他者から何らかの利益を受け取ったと認知したことによって生じた感情を，適切かつ効果的に表出するために用いる言語的・非言語的な行動レパートリー」と定義する。

従来の諸研究の知見を考慮に入れると，感謝表出スキルには様々な種類があると考えられる。感謝の言語的な表出には，少なくとも「ありがとう」と「す

連絡先：✉aikawa@human.tsukuba.ac.jp（相川　充）
1）本研究は，科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）課題番号：26380839）の助成を受けたものである。本研究の実施にあたり，面接調査にご協力くださった方々に，心から感謝申し上げます。

みません」があり（蔵永・樋口，2013），非言語的な表出には，笑顔やお辞儀などがあると言えよう（相川，2013；中島・長谷川・木村，2015）。また，行為による感謝の表出には，「お返しに何かする」や「プレゼントをする」といった返礼行動などがある（蔵永・樋口，2013）。さらに，伝達手段による区分では，「直接（口頭）」表出だけでなく，「電話」，「メール」，「手紙」が挙げられる（藤原・村上・西村・濱口・櫻井，2013）。本研究では，マルチ・チャネル・アプローチ（小川，2011）に準じて，感謝表出スキルを，言語的行動，非言語的行動，返礼行動，伝達手段の4つの観点から検討する。

なお，蔵永・樋口（2013）によると，他者から何らかの支援を受けた時に，その支援が当人にとってあまり利益にならず，当人が感謝感情を感じていなくても，相手に「ありがとう」と言うことがある。これは，「儀礼的な感謝行動」（相川，2014）と呼ばれている。儀礼的な感謝行動は，感謝表出スキルの定義からすると，感謝表出スキルに含まれないが，本研究では補足的に検討する。

ところで，ソーシャルスキルの適切性と効果性は，具体的な特定の対人場面において評価されなければならない（相川，2009）。具体的な特定の対人場面とそこでの具体的な行動とを組み合わせて，ソーシャルスキルを評価することは，「文脈的アプローチ（contextual approach）」と呼ばれている（Warnes, Sheridan, Geske, & Warnes, 2005）。本研究では，この文脈的アプローチの観点から，具体的な対人場面と，そこで実行される感謝表出行動を組み合わせて，感謝表出スキルを検討する。そのため，本研究では，感謝表出行動が実行される対人感謝場面を詳細に検討する。

典型的な対人感謝場面は，被援助場面と贈物受領場面である（蔵永・樋口，2012）。被援助場面は，個人が困っている時に他者から直接支援を受ける場面であり，小学生が特に強く感謝を感じる場面である（藤原他，2013）。贈物受領場面は，個人が困っていない時に他者から直接支援を受ける場面であるとされている。贈物受領場面は，主に他者からプレゼントや物をもらうといった内容が取り上げられている（蔵永・樋口，2011；蔵永・樋口，2012）。

個人が困っていない時に他者から利益を受ける対人感謝場面には，贈物受領場面以外に，好意や親切などを受け取る場面も考えられる（佐竹，2004）。本研究では，このような場面も視野に入れて検討する。

藤原他（2013）は，小学生の感謝表出行動をカテゴリー別に分類し，日常生活において感謝感情をどのように表出するかを検討している。しかし，藤原他（2013）の研究では，感謝を受ける側については検討していない。感謝表出スキルは，誰に対して実行されるかという観点で適切性と効果性が判断される。

そこで本研究では，大学生の同性と異性の友人関係を取りあげて，感謝される対象者が誰であるのかを考慮し，各対象者に対する感謝表出行動を検討する。友人関係を対象にする理由は，大学生にとって友人関係は，「何でも相談できる」，「一緒にいると楽しい」，「困った時に助け合える」といった関係性であり（丹野・松井，2006），重要な対人関係の一つだからである（牧野，2012）。また，大学生は「励まし」，「相談」，「物品提供」などの支援に関して，友人に感謝感情を感じ（佐竹，2004），友人に感謝感情を感じやすい人は，友人からの支援を認知しやすい（吉野・相川，2015）からである。

### 本研究の目的

本研究は，以上の論点を踏まえて，感謝表出スキルの特徴を質的に把握することを目的とする。そのために，対人感謝場面とそこでの具体的な感謝表出行動の関連を検討し，どのような対人感謝場面において，どのような感謝表出行動が適切なソーシャルスキルであるのかを考察する。

なお，本研究で採用する手法は，鈴木（2002）を参考にした半構造化面接である。半構造化面接は，質問紙法とは異なり，面接者の必要に応じてフォローアップの質問や面接対象者の発言の意味の確認が可能であり，対人感謝場面や感謝表出行動に関して，詳細に尋ねることができる。面接対象者の自由回答による質的データの収集に適していると思われる。

## 方　法

本研究は，所属機関の研究倫理委員会の承認を得た上で実施した。

**面接者**：心理学を専攻する大学院生

**面接対象者**：大学生40名（男性20名，女性20名）

### 半構造化面接の手続き

面接対象者は，縁故法と心理学に関する講義の前後の募集で集められた。面接対象者が参加可能な日時に合わせ，実験室にて半構造化面接が実施された。

面接者は，まず，面接調査の内容を面接対象者に説明し，半構造化面接を実施することへの同意を得

てから，面接対象者とラポールを形成するために簡単な会話（大学生活に関することなど）を行った。その後，面接者は半構造化面接を実施した。面接時間は，面接対象者一人あたり約40分程度であった。面接終了後，面接対象者に謝礼としてクオカードを渡した。面接の内容は，IC レコーダーで録音された。

IC レコーダーにより録音された面接対象者の音声は，データとして活用するために，一次資料として書き起こされた。その後，データ分析するために，一次資料は，面接者によって加工された二次資料に編集された。

### 半構造化面接の質問項目

各質問項目は，同性友人および異性友人ごとに尋ねた。ただし，面接対象者が「異性の友人がいない」と応えた場合は，異性の友人に関する質問を行わなかった。

以下の質問項目に基づき，面接を進め，適宜，補足質問を行った。

**性別，年齢，友人の有無と数**　性別，年齢，同性と異性の友人の有無と数について尋ねた。

**友人に対する感謝表出の頻度**　質問は「日頃から友人に対してどれくらい感謝の気持ちを伝えていますか？」であった。選択肢が，「全く伝えない」，「ほとんど伝えない」，「あまり伝えない」，「たまに伝える」，「ときどき伝える」，「よく伝える」，「必ず伝える」の７点であった。

**対人感謝場面**　質問は「実際に友人に対して感謝をした時は，どのような場面ですか？」であった。

**対人感謝感情**　質問は「実際に友人に対して感謝をした時，どのような気持ちになりますか？」であった。

**感謝表出行動**　①言語的な表出に対する質問は「友人に感謝の気持ちを伝える時，実際にどのように言葉にして感謝の気持ちを伝えていますか？」であった。

②非言語的な表出に対する質問は「友人に感謝の気持ちを伝える時，実際にどのようなしぐさ，表情，動作をしていますか？」であった。

③返礼行動に対する質問は「友人に感謝の気持ちを伝える時，実際にどのようにお礼をしていますか？」であった。

④伝達手段に対する質問は「友人に感謝の気持ちを伝える時，実際にどのような伝達方法で感謝を伝えていますか？」であった。

**儀礼的な感謝行動**　質問は「友人に感謝の気持ちを感じていなくても，感謝の言葉を口にしたり，感謝の行動をしたりする時がありますか？」であった。

## 結果と考察

### 面接対象者の年齢，友人の有無と数

面接対象者の平均年齢は20.05（$SD$=1.11）歳であった。

面接対象者の友人の有無については，同性友人が「いる」と回答した者が40人であり，異性友人が「いる」と回答した者が37人であった。なお，「友人がいる」と回答した者の友人数の平均について，同性友人は，30.55（$SD$=27.21）人，異性友人は，17.48（$SD$=22.03）人であった。

### 友人に対する感謝表出の頻度

同性友人に対する感謝表出の頻度と，異性友人に対する感謝表出の頻度のそれぞれの平均値は，5.45（$SD$=1.13）と4.88（$SD$=1.70）であった。両平均値のあいだには有意な差があった（$t$=2.94，$df$=39，$p$<.05）。感謝表出の頻度は，異性友人に対するよりも，同性友人に対する方が多かった。

同性友人に対する感謝表出の頻度と，異性友人に対する感謝表出の頻度の間には，有意な正の相関（$r$=.66，$p$<.01）が示された。したがって，同性友人に対して感謝表出の頻度が高い大学生は，異性友人に対する感謝表出の頻度も高いことが予測される。

### 対人感謝場面に関する記述の分類

対人感謝場面に関する記述数は，同性友人268項目，異性友人130項目であった。

心理学を専攻する大学生２名が，先行研究（蔵永・樋口，2011；蔵永・樋口，2012）を参考にして作成されたカテゴリー表に基づき，対人感謝場面に関する記述398項目を分類した。

同性友人に対する対人感謝場面の一致率は，$\kappa$=.73，異性友人に対する対人感謝場面の一致率は，$\kappa$=.66であった。評定者間で不一致が見られた記述は，協議により，いずれかのカテゴリーに分類した。その結果，対人感謝場面は，10場面に分類された（Table 1）。

蔵永・樋口（2011）では，主な対人感謝場面は，「被援助場面」と「贈物受領場面」であったが，本研究は，より詳細な対人感謝場面を明らかにした。

本研究における「被援助場面」，「情報入手場面」，「相談場面」は，蔵永・樋口（2011）の「被援助場面」に相当し，「祝福場面」は，蔵永・樋口（2011）の「贈

Table 1
対人感謝場面のカテゴリー表と同性および異性友人における記述数

| カテゴリー | 対人感謝場面<br>操作的定義（上段）/ 記述例（下段） | 同性友人<br>記述数（%） | 異性友人<br>記述数（%） |
|---|---|---|---|
| 被援助場面 | 他者から支援されることによって感謝の感情を感じる対人場面<br>困っている時に助けてくれたなどに関する記述 | 25（63%） | 14（35%） |
| 情報入手場面 | 他者から有益な情報をもらって感謝の感情を感じる対人場面<br>自分がわからないことを教えてくれたなどに関する記述 | 21（53%） | 9（23%） |
| 交友場面 | 他者と交遊することによって感謝の感情を感じる対人場面<br>友人との遊びに関する記述 | 27（68%） | 13（33%） |
| 親切場面 | 他者から親切にされることによって感謝の感情を感じる対人場面<br>心配された，気にかけてくれたなどに関する記述 | 14（35%） | 7（18%） |
| 道具入手場面 | 他者から当人の必要な物をもらって感謝の感情を感じる対人場面<br>授業のプリントをもらう，物を借りるなどに関する記述 | 14（35%） | 9（23%） |
| 飲食受領場面 | 他者から飲食物をもらって感謝を感じる対人場面<br>飲食物をもらうなどに関する記述例 | 20（50%） | 12（30%） |
| 他者評価場面 | 他者から評価されることによって感謝の感情を感じる対人場面<br>褒められたり，励まされたり，応援されたりしたなどに関する記述 | 8（20%） | 3（8%） |
| 相談場面 | 他者に相談や悩みを聞いてもらうことによって感謝の感情を感じる対人場面<br>話を聞いてもらったり，アドバイスをもらったりしたなどに関する記述 | 28（70%） | 18（45%） |
| 祝福場面 | 他者から祝福されることによって感謝の感情を感じる対人場面<br>誕生日にお祝いをしてもらったなどに関する記述 | 28（70%） | 9（23%） |
| 協力場面 | 他者から協力されることによって感謝の感情を感じる対人場面<br>サークルの仕事をしてくれた，積極的に何らかの行動をしてくれたなどに関する記述 | 18（45%） | 14（35%） |

物受領場面」に相当すると考えられる。これら以外の対人感謝場面は，「交友場面」，「親切場面」，「道具入手場面」，「飲食受領場面」，「他者評価場面」，「協力場面」であった。

大学生は，友人からの「娯楽」，「親切」，「物品提供」，「励まし」などの支援によって，友人に対して感謝感情を感じると言われている（佐竹，2004）。これらの支援を受ける場面が，本研究で明らかになった「交友場面」，「親切場面」，「道具入手場面」，「飲食受領場面」，「他者評価場面」，「協力場面」であると考えられる。

調査対象者が小学生であった藤原他（2013）の結果では，対人感謝場面は「被援助場面」のみであったが，本研究では多岐にわたる場面が抽出された。この結果は，本研究の調査対象者が，小学生よりは自立した大学生であったため，大学生が様々な対人場面に遭遇し，他者との交互作用の中で感謝を感じる経験を数多くしていることに因ると思われる。

## 対人感謝感情に関する記述の分類

対人感謝感情に関する記述数は，同性友人162項目，異性友人100項目であった。

心理学を専攻する大学生２名が，蔵永・桶口（2011）を参考にして作成されたカテゴリー表に基づき，対人感謝感情に関する記述262項目を分類した。

同性友人に対する対人感謝感情の一致率は，$\kappa = .99$，異性友人に対する対人感謝感情の一致率は，$\kappa = .98$であった。評定者間で不一致が見られた記述は，協議により，いずれかのカテゴリーに分類した。その結果，対人感謝感情は，「ありがたさ」と「申し訳なさ」に２分された（Table 2）。

日本人の対人感謝感情には，肯定的側面（満足，幸せ，喜びなど）と非肯定的側面（すまなさ，申し訳なさ，恐縮など）があると従来から指摘されている（蔵永・桶口，2011）。本研究の対人感謝感情の２分類は，従来の結果を追認するものであった。つまり，他者に対して感謝感情を感じた時，「ありがたさ」と「申し訳なさ」を感じると考えられる。

## 感謝表出行動に関する記述の分類

感謝表出行動に関する記述数は，同性友人567項

Table 2
対人感謝感情のカテゴリー表と同性および異性友人における記述数

| カテゴリー | 対人感謝感情<br>操作的定義（上段）/ 記述例（下段） | 同性友人<br>記述数（%） | 異性友人<br>記述数（%） |
|---|---|---|---|
| ありがたさ | 当人が他者に対して感謝の感情を感じる時に認知する肯定的感情<br>ありがたい，嬉しい，安心，満足，幸せなどの肯定的内容に関する記述 | 40（100%） | 35（88%） |
| 申し訳なさ | 当人が他者に対して感謝の感情を感じる時に認知する非肯定的感情<br>申し訳ない，お返しをしたいなどの非肯定的内容に関する記述 | 36（90%） | 24（60%） |

Table 3
感謝表出行動のカテゴリー表と同性および異性友人における記述数

| カテゴリー | 感謝表出行動<br>操作的定義（上段）/ 記述例（下段） | 同性友人<br>記述数（%） | 異性友人<br>記述数（%） |
|---|---|---|---|
| 言語的表出 | 当人が他者に対して感謝の感情を感謝や謝罪の言葉によって表出すること<br>ありがとう，助かった，ごめんねなどに関する記述 | 40（100%） | 34（86%） |
| 非言語的表出 | 当人が他者に対して感謝の感情を表情やジェスチャーによって表出すること<br>笑顔，会釈，手を合わせるなどに関する記述 | 39（98%） | 34（86%） |
| 返礼行動 | 当人が他者に対して感謝の感情を言葉，表情，動作を除く行動<br>お菓子をあげる，ご飯をご馳走するなどのお礼に関する記述 | 35（88%） | 32（80%） |
| 伝達手段 | 当人が他者に対して感謝の感情を伝えるために用いる手段<br>直接，電話，メール，SNS，手紙などの伝達手段に関する記述 | 40（100%） | 36（90%） |

目，異性友人333項目であった。

心理学を専攻する大学生２名が，先行研究（藤原他，2013；蔵永・樋口，2013）を参考にして作成されたカテゴリー表に基づき，感謝表出行動に関する記述900項目を分類した。

同性友人および異性友人に対する感謝表出行動の一致率はともに，$\kappa=.94$であった。評定者間で不一致が見られた記述は，協議によりいずれかのカテゴリーに分類した。その結果，感謝表出行動は，Table 3に示したように，４種類に分類された。

「言語的表出」には，蔵永・樋口（2013）で述べられている「ありがとう型」と「すみません型」以外に，「なんかあったら言ってね」，「今度，ご飯をおごるね」，「嬉しい」，「さすが（褒める）」などの表現も含まれた。

「非言語的表出」には，先行研究（相川，2013；中島他，2015）と同様に，「笑顔」「会釈」が含まれていた。先行研究と異なっていた点は，表情に関する記述例として「真剣な表情」や「申し訳なさそうな表情」，ジェスチャー（身振り，手振り）の動作に関する記述例として，「両手を合わせる」，「目を見る」，「片手を上げる」などの記述が報告された。

「返礼行動」には，蔵永・樋口（2013）と同様に，「プレゼントを渡す」や「お返しに何かをする」が報告された。本研究の「お返しに何かをする」には，「授業のプリントを取る」，「お土産を渡す」，「ご飯をおごる」，「相談を聞く」，「遊びに誘う」などが報告された。

「伝達手段」には，藤原他（2013）と同様の「直接」，「電話」，「メール」が含まれていた。藤原他（2013）と異なっていた点は，「SNS（LINE や Twitter など）」が「伝達手段」として報告されたことである。

Table 4と Table 5は，Table 3の感謝表出行動の各カテゴリーに基づいた，同性友人および異性友人における感謝表出行動の具体例と度数を示したものである。

Table 4の同性友人に対する結果と，Table 5の異性友人に対する結果では，同性友人では「ハグをする」「腕を背中に回す」などの身体接触が伴う行動が実行されているが，異性友人では，これらの行動は抑制されている。ただし「肩をたたく」は両者で出現している。

なお，本研究で補足的に尋ねた「儀礼的な感謝行動」は，感謝の対象者が，「先生」「アルバイト先の上司」「インターンシップ先の方」などであった。これらの対象者との関係は，友人関係ではないため，本研究では，カテゴリー表から除外した。

### 対人感謝場面と感謝表出行動の関連

どのような対人感謝場面において，どのような感

謝表出行動が実行されうるのかを考察するために，同性友人および異性友人に対する対人感謝場面と感謝表出行動との関連を検討した。具体的には，まず，同性友人および異性友人の対人感謝場面と感謝表出行動のクロス集計表をもとに，コレスポンデンス分析を実施した。次に，コレスポンデンス分析から得た結果（プロット図）を解釈するために，コレスポンデンス分析のカテゴリースコアをもとにクラスター分析（Ward 法）を実施した。これらの統計学的な分析には，SPSS と HAD（清水，2016）を使用した。

同性友人の対人感謝場面における感謝表出行動に関するクラスター分析の結果から，2つのクラスターに分けて解釈することが可能であると判断した（Figure 1）。第1クラスターは，対人感謝場面の「被援助場面」，「交友場面」，「親切場面」，「相談場面」，「祝福場面」において，感謝表出行動の「言語的表出」，「伝達手段」が機能しやすいと解釈したクラスターから構成された。第2クラスターは，対人感謝場面の「情報入手場面」，「道具入手場面」，「飲食受領場面」，「他者評価場面」，「協力場面」において，感謝表出行動の「非言語的表出」，「返礼行動」が機能しやすいと解釈したクラスターから構成された。

異性友人の対人感謝場面における感謝表出行動に関するクラスター分析の結果から，3つのクラスターに分けることが可能であると判断した（Figure 2）。第1クラスターは，対人感謝場面の「協力場面」，「相談場面」，「交友場面」，「被援助場面」，「飲

Table 4
同性友人に対する感謝表出行動リストと度数

| | 同性友人に対する感謝表出行動リスト | 度数 |
|---|---|---|
| 言語的表出 | ありがとう型の感謝表現（ありがとう，助かった，楽しかった，嬉しい，さすが） | 40 |
| | すみません型の感謝表現（ごめんね，悪いね，すまん） | 15 |
| | ありがとう型とすみません型混合の感謝表現（ごめんね＋ありがとう） | 21 |
| | その他の感謝表現（なんかあったらいってね，なんかおごるね，こんなものもらっていいの，あなたがいてよかった） | 8 |
| 非言語的表出 | 明るい声の調子 | 2 |
| | 笑顔 | 36 |
| | 申し訳なさそうな顔 | 23 |
| | その他の表情（平穏・真剣・驚き） | 9 |
| | お辞儀（会釈） | 12 |
| | ハグ | 6 |
| | 両手を合わせる | 17 |
| | 片手をあげる | 12 |
| | その他の動作（目を見る・ジェスチャー・相手に体を向ける・腕を背中に回す，親指を立てる，肩をたたく，プレゼントをわかりやすく示す） | 9 |
| 返礼行動 | プリントを取ってあげる | 7 |
| | プレゼントをあげる | 15 |
| | 食べ物を持っていく | 5 |
| | 何か手伝う | 3 |
| | 相談を聞く | 8 |
| | 遊びに行く | 4 |
| | お土産を渡す | 13 |
| | ご飯をおごる | 13 |
| | 物をあげる | 19 |
| | 相手がしてくれたことと同じことをやってあげる | 14 |
| 伝達手段 | 口頭（直接） | 37 |
| | SNS | 39 |
| | 手紙・メッセージカード・色紙 | 16 |
| | メモ・付箋 | 8 |
| | 電話・メール | 9 |

食受領場面」,「道具入手場面」において，感謝表出行動の「言語的表出」,「非言語的表出」,「伝達手段」が機能しやすいと解釈したクラスターから構成された。第２クラスターは，対人感謝場面の「情報入手場面」,「親切場面」,「祝福場面」において，感謝表出行動の「返礼行動」が機能しやすいと解釈したクラスターから構成された。第３クラスターは，対人感謝場面の「他者評価場面」のみから構成された。

## 総合考察

本研究の目的は，感謝表出スキルの特徴を質的に把握することであった。この目的のために，本研究では，文脈的アプローチ（Warnes et al., 2005）に準じて，具体的な対人感謝場面において，特定の感謝表出行動を実行することが，感謝表出スキルとして機能すると考えた。そこで，以下では，対人感謝場面と感謝表出行動の関連に関するクラスター分析の結果に基づいて，どのような対人感謝場面において，どのような感謝表出行動を実行することが，感謝表出スキルとして機能しやすいのかを考察する。

### 有効な感謝表出スキル

本研究では，感謝の対象者が同性友人の場合と，異性友人の場合では，対人感謝場面と感謝表出行動の関連が異なるクラスターが抽出された。

同性友人では，２つのクラスターが抽出され,「言語的表出」と「伝達手段」が機能しやすい対人感謝場面と解釈した第１クラスター,「非言語的表出」と「返礼行動」が機能しやすい対人感謝場面と解釈した第２クラスターに分けられると判断した。

第１クラスターからは，対人感謝場面の「被援助場面」,「交友場面」,「親切場面」,「相談場面」,「祝福場面」において，感謝表出行動の「言語的表出」,

Table 5
異性友人に対する感謝表出行動リストと度数

| | 異性友人に対する感謝表出行動のリスト | 度数 |
|---|---|---|
| 言語的表出 | ありがとう型の感謝表現（ありがとう，助かった，楽しかった，嬉しい，さすが） | 34 |
| | すみません型の感謝表現（ごめんね，悪いね，すまん） | 8 |
| | ありがとう型とすみません型混合の感謝表現（ごめんね＋ありがとう） | 10 |
| | その他の感謝表現（なんかあったらいってね，なんかおごるね，こんなものもらっていいの，あなたがいてよかった） | 5 |
| 非言語的表出 | 明るい声の調子 | 2 |
| | 笑顔 | 27 |
| | 申し訳なさそうな顔 | 14 |
| | その他の表情（平穏・真剣・驚き） | 8 |
| | お辞儀（会釈） | 9 |
| | 両手を合わせる | 11 |
| | 片手をあげる | 8 |
| | その他の動作（目を見る・相手に体を向ける・プレゼントをわかりやすく示す，肩をたたく） | 3 |
| 返礼行動 | プレゼントをあげる | 7 |
| | 何か手伝う | 6 |
| | 相談を聞く | 3 |
| | 遊びに行く | 3 |
| | お土産を渡す | 6 |
| | ご飯をおごる | 6 |
| | 物をあげる | 15 |
| | 相手がしてくれたことと同じことをやってあげる | 8 |
| | その他の行動（物を貸す・食べ物を持っていく） | 2 |
| 伝達手段 | 口頭（直接） | 32 |
| | SNS | 31 |
| | 手紙・メッセージカード・色紙 | 6 |
| | メモ・付箋 | 2 |
| | 電話・メール | 3 |

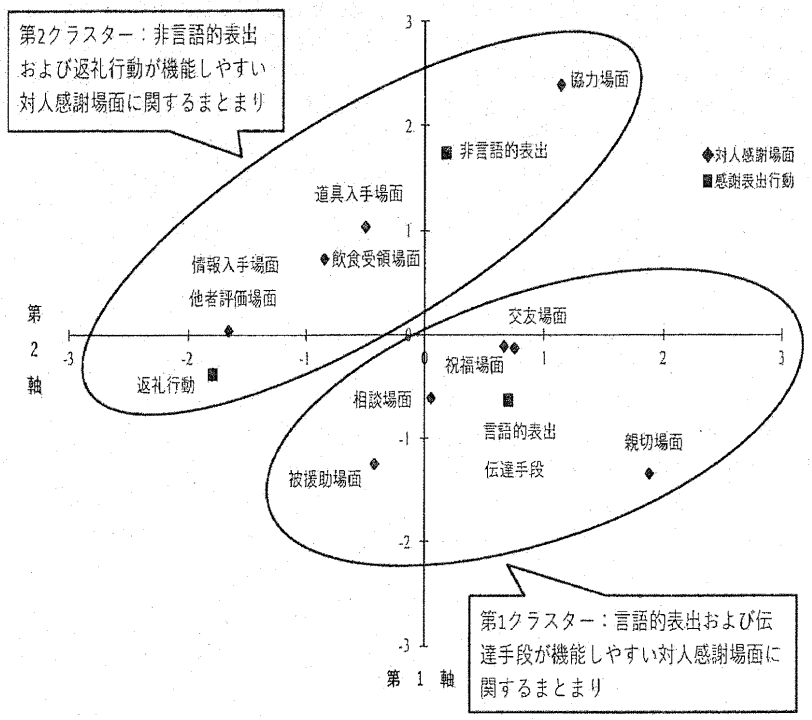


Figure 1.　同性友人の対人感謝場面と感謝表出行動の分析結果

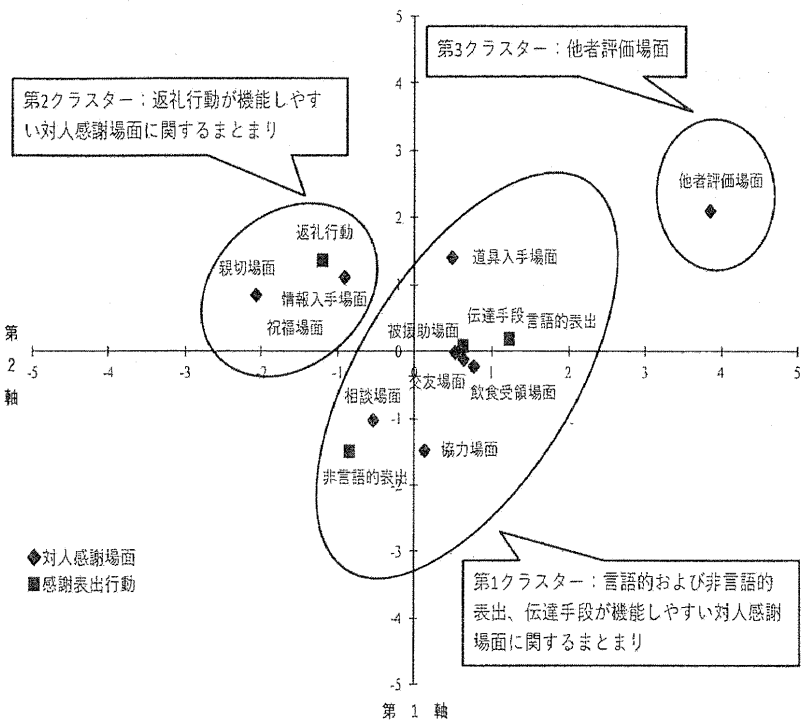


Figure 2.　異性友人の対人感謝場面と感謝表出行動の分析結果

「伝達手段」が機能しやすいことが推察される。したがって，例えば，「同性の友人に相談を聞いてもらった場合」，「体調が悪い時，同性の友人に看病をしてもらった場合」，「同性の友人にバイトのシフトを変わってもらった場合」，「同性の友人と遊んだ場合」，「同性の友人から誕生日を祝ってもらった場合」などに，「感謝の言葉を直接もしくは電話，メール，SNSなどの手段を用いて伝えること」が感謝表出スキルとして有効であると思われる。

第2クラスターからは，対人感謝場面の「情報入手場面」，「道具入手場面」，「飲食受領場面」，「他者評価場面」，「協力場面」において，感謝表出行動の「非言語的表出」，「返礼行動」が機能しやすいことが推察される。したがって，例えば，「同性の友人からご飯をおごってもらった場合，次は当人がご飯をおごること」，「同性の友人から褒められた場合，笑顔で感謝の気持ちを伝えること」，「同性の友人がサークルでの仕事に協力してくれた場合は，当人も協力すること」などが感謝表出スキルとして有効であると思われる。

他方，異性友人では，3つのクラスターが抽出され，「言語的表出」，「非言語的表出」，「伝達手段」が機能しやすい対人感謝場面と解釈した第1クラスター，「返礼行動」が機能しやすい対人感謝場面と解釈した第2クラスター，対人感謝場面の「他者評価場面」のみの第3クラスターに分けられると判断した。

第1クラスターからは，対人感謝場面の「被援助場面」，「交友場面」，「道具入手場面」，「飲食受領場面」，「相談場面」，「協力場面」において，感謝表出行動の「言語的表出」，「非言語的表出」，「伝達手段」が機能しやすいことが推察される。したがって，例えば，「異性の友人に相談を聞いてもらった場合」，「体調が悪い時，異性の友人に看病をしてもらった場合」，「異性の友人にバイトのシフトを変わってもらった場合」，「異性の友人と遊んだ場合」，「同性の友人がサークルでの仕事に協力してくれた場合」などに，「感謝の言葉，表情やジェスチャー，直接もしくは電話，メール，SNSなどの手段を用いて伝えること」が感謝表出スキルとして有効であると思われる。

第2クラスターからは，対人感謝場面の「情報入手場面」，「親切場面」，「祝福場面」において，感謝表出行動の「返礼行動」が機能しやすいことが推察される。したがって，例えば，「異性の友人が自分にわからないことを教えてくれた場合，自分も異性の友人にわからないことを教える」，「異性の友人が自分の誕生日を祝ってくれた場合，今度は自分が異性の友人の誕生日にプレゼントを渡すこと」などが感謝表出スキルとして有効であると思われる。

第3クラスターは，対人感謝場面の「他者評価場面」のみであったため，異性の友人から褒められる場合に有効に機能しやすい感謝表出スキルは，本研究の範囲では断定できない。

## 本研究のまとめ

本研究は，対人感謝場面と感謝表出行動を組み合わせることで，どのような感謝表出スキルが有効に機能するかを明らかにした。同性友人と異性友人では，有効に機能する感謝表出スキルは異なっていた。

本研究の結果は，感謝表出スキルの実行の程度を測定する尺度開発に関する今後の研究に貢献するであろう。

ただし，本研究の面接対象者は大学生のみであった。本研究の結果が一般性を有しているかどうか，サンプルの範囲を広げて，さらに検討する必要がある。また，本研究で明らかになった感謝表出スキルの実行効果は，今後，実験室実験や介入実験などの手法によって因果的に分析する必要がある。

## 引用文献

相川　充（2009）．新版　人づきあいの技術　ソーシャルスキルの心理学　セレクション社会心理学－20　サイエンス社

相川　充（2014）．対人関係に及ぼす「感謝」のポジティブ効果に関する拡張・形成理論からの実験的研究，平成23年度～平成25年度 科学研究費助成事業 研究成果報告書．

相川　充・佐藤正二・佐藤容子・高山　巌（1993）．孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究――孤独感と社会的スキルとの関係――，社会心理学研究，*8*，44-55.

Algoe, S. B. (2012). Find, remind, and bind: The functions of gratitude in everyday relationships. *Social and Personality Psychology Compass*, *6*, 455-469.

Algoe, S. B., Fredrickson, B. L., & Gable, S. L. (2013). The social functions of the emotion of gratitude via expression, *Emotion*, *13*, 1-5.

Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and prosocial behavior helping when it costs you, *Psychological Science*, *17*, 319-325.

藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・櫻井茂男（2013）．小学生における感謝生起状況と

その表明についての探索的研究，筑波大学心理学研究，*24*，19-26.

蔵永　瞳・樋口匡貴（2011）．感謝の構造――生起状況と感情体験の多様性を考慮して――，感情心理学研究，*18*，111-119.

蔵永　瞳・樋口匡貴（2012）．感謝が生じやすい状況における感情体験の特徴，広島大学心理学研究，*12*，15-27.

蔵永　瞳・樋口匡貴（2013）．感謝生起状況における状況評価と感情体験が対人行動に及ぼす影響，心理学研究，*84*，376-385.

Lambert, N. M., & Fincham, F. D. (2011). Expressing gratitude to a partner leads to more relationship maintenance behavior. *Emotion*, *11*, 52-60.

McCullough, M. E., Kilpatrick, S. D., Emmons, R. A., & Larson, D. B. (2001). Is gratitude a moral affect? *Psychological Bulletin*, *127*, 249-266.

McCullough, M. E., Kimeldorf, M. B., & Cohen, D. (2008). An adaptation for altruism? The social causes, social effects, and social evolution of gratitude. *Current Directions in Psychological Science*, *17*, 281-285.

牧野幸志（2012）．青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係――同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差――，学年差の検討，経営情報研究，*20*，17-32.

中島清貴・長谷川達人・木村春彦（2015）．お辞儀の正確さ評価システムのための単眼カメラ動画からのパラメータ測定，研究報告ユビキタスコンピューティングシステム　情報処理学会研究報告，*47*，1-7.

大井田莉奈・宮本正一（2009）．青年期における異性との友人関係の発達，岐阜大学教育学部研究報告，人文科学，*58*，177-186.

小川一美（2011）．対人コミュニケーションに関する実験的研究の動向と課題，教育心理学年報，*50*，187-198.

鈴木淳子（2002）．調査的面接法の技法　第2版，ナカニシヤ出版

佐竹真次（2004）．人は何について感謝しているか－大学生とその親がいだく感謝の内容と相手－，山形保健医療研究，*7*，1-8.

清水裕士（2016）．フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究，*1*，59-73.

丹野宏明・松井　豊（2006）．大学生における友人関係機能の探索的検討，筑波大学心理学研究，*32*，21-30.

Warnes, E. D., Sheridan, S. M., Geske, J., & Warnes, W. A. (2005). A contextual approach to the assessment of social skills: Identifying meaningful behaviors for social competence. *Psychology in the Schools*, *42*, 173-187.

Watkins, P. C. (2007). Gratitude. In R. Baumeister & K. Vohs(Eds.), *Encyclopedia of social psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage. pp. 383-384.

吉野優香・相川　充（2015）．特性感謝がソーシャルサポートの知覚に及ぼす効果―感謝の利益発見機能からの検討―，筑波大学心理学研究，*49*，33-43.

（受稿4月28日：受理6月12日）